

独立行政法人海技教育機構
海技大学校

平成26年度

研究報告書及び 研究経過報告書

平成27年7月

海技大学校

研究管理委員会

〒659-0026 兵庫県芦屋市西蔵町 12-24

TEL: 0797-38-6281(教務課)

e-mail: kyoumu@mail.mtc.ac.jp

<http://www.mtc.ac.jp>

平成26年度 研究管理委員会委員

委員長	角	和芳
航海科	田中	賢司
	川崎	真人
機関科	藤谷	達也
	佐藤	歩美
教務課	佐藤	圭司

平成27年度 研究管理委員会委員

委員長	角	和芳
航海科	田中	賢司
	川崎	真人
機関科	藤谷	達也
	長谷川	雅俊
教務課	佐藤	圭司

1. 序章

本報告書は「独立行政法人海技教育機構海技大学校（以下、海技大学校とする）研究業務規程第6条」に基づき、各研究テーマの代表者が校長に提出した研究報告書及び研究経過報告書をもとに、研究管理委員会が「海技大学校研究管理委員会に関する達、第2条第6項」の規程により取りまとめたものである。

なお、研究テーマごとに代表者が校長に提出した上記の研究報告書の中で、「海技大学校研究業務評価要領」に基づく研究担当者本人の自己評価及び各科評価が含まれている。この自己評価及び各科評価に加えて全体評価を研究管理委員会が行った。

これらの評価の後、本報告書は教員会議及び幹部会の審議を経て承認されたものである。

2. 平成26年度研究業務の報告

2.1 実施研究テーマ

年度当初に研究者から提出された「教員研究テーマ申請書」に基づき承認された研究テーマは、表-1に示す21件であった。教員研究テーマの申請書には、研究の目的、研究の概要、研究の実施項目及び方法、期待される効果、必要経費、成果の発表予定等の記載を求めた。ここで、表-1-1に研究の分類を示す

いずれも、「船舶の運航に関する高度の学術及び技能並びに船員の教育に関する研究を行う」ものとする独立行政法人海技教育機構業務方法書の研究業務の目的に添ったものである。

表-1 平成26年度海技大学校教員研究テーマ一覧表

研究番号	科	研究テーマ名	研究の分類	代表者	終了・継続
A14-001-1	N	船舶の運航技術の伝承に関する研究	E	航海科長	継続
A14-002-1	E	船用機関技術の最近の動向と機関士教育・訓練	E	機関科長	継続
11-001-4	N	港内タグボートの安全性に関する研究	C	石倉 歩	終了
12-002-3	N	海事思想の普及へ向けての一試行（コンラッド海洋作品における海政学的要素について）	G	田中賢司	終了
12-006-3	E	船舶機関システムの運転管理に関する研究	C	伊丹良治	終了
12-007-3	E	Engine-room Team Management 訓練に関する研究	E	佐藤歩美	終了
12-008-3	E	機関室シミュレータを用いた運航に関する省エネルギー評価について	B	佐藤圭司	終了
12-009-3	E	分析機器を利用した海洋環境教育に関する研究	D	藤谷達也	終了
13-003-2	N	航海情報の統合に関する研究	C	堀 晶彦	継続
13-005-2	N	GPS 信号伝搬特性と測位精度に関する研究	C	奥田成幸	終了
14-001	N	小型船における AIS 受信波のマルチパス影響に関する調査研究	C	中島賢二	継続
14-002	N	ECDIS における情報レイヤーのユーザビリティに関する研究	C	中川浩一郎	継続
14-003	N	海事政策と異文化コミュニケーションに関する研究～アメリカ文化における記憶・忘却と「海洋」	F	杉田和己	継続
14-004	N	漁船と動力船との衝突事故に関する一考察	F	岩瀬 潔	継続
14-005	E	太陽電池及び燃料電池システムの船舶電源への導入に関する研究	D	角 和芳	継続
14-006	E	フライングロボットの船舶における応用	B	前田 潔	継続
14-008	E	船用ボイラの安全性・信頼性の向上に関する研究	C	中村雄史	継続
14-010	E	気液二相流の過渡多次元挙動解明に関する研究	B	近藤宏一	継続
14-011	N	情報通信システムを利用した離着岸操船支援に関する研究	C	藤井迪生	継続
14-012	N	霧消散予測に関する基礎的研究	A	市川義文	継続
14-013	N	油濁海難事故に備えた法整備 副題 北極海航路の行方	D	遠藤小百合	継続

表－1-1 研究の分類

記号	分類
A	船舶の運航技術に関する研究（航海系）
B	船舶の運航技術に関する研究（機関係）
C	船舶の安全性・信頼性に関する研究
D	海洋汚染等船舶の運航に関して発生する環境問題に関する研究
E	船員の教育訓練に関する研究
F	船員政策・海事法規・海運経済・海事史に関する研究
G	海事思想の普及に関する研究

2.2 外部資金による産学連携研究

研究分野における海技大学校と海事産業界との連携・協力は資金の面も含めて、今後ますます発展させる必要がある。本校では外部資金導入による受託研究及び共同研究を積極的に推進している。平成26年度は以下に示すように、受託研究1件及び共同研究2件が行われた。また、表－2に平成22年度から平成26年度までの研究に関する外部資金獲得状況を示す。

【受託研究】

研究題目：操船シミュレータ訓練等における調査研究

研究担当者：航海科 教員

期間：平成26年4月1日～平成27年3月31日

受託先：社団法人 日本船長協会

経費：¥2,750,000

【共同研究】

研究題目：AISの利便性向上に関する研究

研究代表者：航海科 奥田成幸

期間：平成26年10月1日～平成27年3月31日

共同研究機関：独立行政法人 航海訓練所

【共同研究】

研究題目：ECDISにおける情報レイヤーユーザビリティに関する研究

研究担当者：航海科 石倉 歩

期間：平成26年11月1日～平成27年3月31日

共同研究機関：独立行政法人 航海訓練所

表-2 外部資金獲得状況（平成22年度～平成26年度）

	研究題目	提携先	契約金額
平成 26年 度	操船シミュレータ訓練調査研究	(社) 日本船長協会	2,750,000
		小計	2,750,000

	研究題目	提携先	契約金額
平成 25年 度	操船シミュレータ訓練調査研究	(社) 日本船長協会	2,750,000
		小計	2,750,000

平成 24年 度	操船シミュレータ訓練調査研究	(社) 日本船長協会	2,310,000
	ECDIS訓練等における調査研究	(社) 日本船長協会	3,852,000
		小計	6,162,000

平成 23年 度	操船シミュレータ訓練調査研究	(社) 日本船長協会	2,310,000
	船体操船および係留監視システムに関する検証実験	(株)横浜ゴム	1,020,000
		小計	3,330,000

平成 22年 度	操船シミュレータ訓練調査研究	(社) 日本船長協会	2,310,000
	大型船等の係留時における係留索使用上の安全対策検討調査	(社) 神戸海難防止研究会	108,900
		小計	2,418,900

2.3 その他の共同研究

海技大学校が単独で行う研究に加えて、多くの研究テーマは他の研究機関に所属する研究者と共同で実施し、研究活動の活性化が図られた。表-2-2に一般研究で海技大学校の職員以外の共同研究者が所属する機関名と研究テーマ件数を示す。

表－2-2 共同研究者の所属機関

分類と機関名		テーマ件数
研究機関等	神戸大学海事科学部	2
	大阪大学	1

2.4 予算の使用実績

限られた予算の中で計画した研究による効果的な成果を得るために、テーマごとに見込まれる発表成果のレベルを表－3に示す通り分類し、同表に示す予算限度額以内で必要経費の申請を行い、さらに海大全体の予算計画で提示された研究費に収まるように修正し、テーマ別予算配分が決定された。

平成26年度当初は各申請の約26%の減額になった。表－4は、予算配分に対し、予算使用実績割合を示す。さらに、表－5は予算使用率別のテーマ件数を示す。

表－3 テーマ当たり予算要求限度額

発表レベル	説明	予算限度額 (1テーマ当り)
L1	査読付学会誌論文発表	80万円以下
L2	国際会議講演発表	70万円以下
L3	国内学会講演発表	60万円以下
L4	海技大学校研究報告	40万円以下

注) 論文発表で1st著者以外は全てレベルL4として扱う

表－4 平成26年度重点研究および一般研究予算使用実績

研究番号	研究テーマ名	代表者	予算使用率
A14-001-1	船舶の運航技術の伝承に関する研究	航海科長	57%
A14-002-1	船用機関技術の最近の動向と機関士教育・訓練	機関科長	34%
11-001-4	港内タグボートの安全性に関する研究	石倉 歩	147%
12-002-3	海事思想の普及へ向けての一試行（コンラッド海洋作品における海政学的要素について）	田中賢司	88%
12-006-3	船舶機関システムの運転管理に関する研究	伊丹良治	92%
12-007-3	Engine-room Team Management 訓練に関する研究	佐藤歩美	98%
12-008-3	機関室シミュレータを用いた運航に関する省エネルギー評価について	佐藤圭司	50%

12-009-3	分析機器を利用した海洋環境教育に関する研究	藤谷達也	83%
13-003-2	航海情報の統合に関する研究	堀 晶彦	97%
13-005-2	GPS 信号伝搬特性と測位精度に関する研究	奥田成幸	99%
14-001	小型船における AIS 受信波のマルチパス影響に関する調査研究	中島賢二	91%
14-002	ECDIS における情報レイヤーのユーザビリティに関する研究	中川浩一郎	55%
14-003	海事政策と異文化コミュニケーションに関する研究～アメリカ文化における記憶・忘却と「海洋」	杉田和己	100%
14-004	漁船と動力船との衝突事故に関する一考察	岩瀬 潔	90%
14-005	太陽電池及び燃料電池システムの船舶電源への導入に関する研究	角 和芳	108%
14-006	フライングロボットの船舶における応用	前田 潔	102%
14-008	船用ボイラの安全性・信頼性の向上に関する研究	中村雄史	85%
14-010	気液二相流の過渡多次元挙動解明に関する研究	近藤宏一	103%
14-011	情報通信システムを利用した離着岸操船支援に関する研究	藤井迪生	99%
14-012	霧消散予測に関する基礎的研究	市川義文	103%
14-013	油濁海難事故に備えた法整備 副題 北極海航路の行方	遠藤小百合	94%

表－5 予算使用率別テーマ件数

予算使用率	件数
120%以上	1
100%超 120%以下	4
80%超 100%以下	12
60%超 80%以下	—
40%超 60%以下	3
20%超 40%以下	1
0%超 20%以下	—
0%	—
合 計	21

2.5 研究成果の発表予定と実績

研究成果はそれぞれの研究者が所属する学会等の論文誌、講演会等で発表された。その内訳を表－6に示す。同表には研究計画書に記載された発表予定についても記載した。個々の発表について研究成果の内容(要旨)とともに海技大学のホームページで公開した。ここで、研究成果の発表まで至らなかった研究テーマについては、次年度以降に成果発表が行われる様に継続申請され(*1)、継続申請されなかった研究テーマ(*2)については新規テーマが申請され、新規テーマの成果に平成26年度の実施内容が反映される見込みである。次に、表－6-2に研究数の内訳を記す。

表－6 平成26年度研究発表実績

()内は回数を示す。

研究番号	分類	研究テーマ名	代表者	継続 終了	計 画	実 績
A14-001-1	重点	船舶の運航技術の伝承に関する研究 (*1)	航海科長	継続	—	L4(2)
A14-002-1	重点	船用機関技術の最近の動向と機関士教育・訓練 (*1)	機関科長	継続	—	—
11-001-4	C	港内タグボートの安全性に関する研究	石倉 歩	終了	L1(2)	L1(3), L4
12-002-3	G	海事思想の普及へ向けての一試行(コンラッド海洋作品における海 政学的要素について)	田中賢司	終了	L1,L4	L1,L3(2)
12-006-3	C	船舶機関システムの運転管理に関する研究	伊丹良治	終了	L3,L4	L3,L4
12-007-3	E	Engine-room Team Management 訓練に関する研究	佐藤歩美	終了	L3,L4	L3(2),L4
12-008-3	B	機関室シミュレータを用いた運航に関する省エネルギー評価につ いて (*2)	佐藤圭司	終了	L3	—
12-009-3	D	分析機器を利用した海洋環境教育に関する研究 (*2)	藤谷達也	終了	—	—
13-003-2	C	航海情報の統合に関する研究	堀 晶彦	継続	L2	L2
13-005-2	C	GPS 信号伝搬特性と測位精度に関する研究 (*2)	奥田成幸	終了	L2	—
14-001	C	小型船における AIS 受信波のマルチパス影響に関する調査研究	中島賢二	継続	L2	L2
14-002	C	ECDIS における情報レイヤーのユーザビリティに関する研究 (*1)	中川浩一郎	継続	L1,L3	—
14-003	F	海事政策と異文化コミュニケーションに関する研究～アメリカ文 化における記憶・忘却と「海洋」	杉田和己	継続	L4	L4
14-004	F	漁船と動力船との衝突事故に関する一考察	岩瀬 潔	継続	L4	L3(2),L4
14-005	D	太陽電池及び燃料電池システムの船舶電源への導入に関する研究	角 和芳	継続	L2,L3	L2
14-006	B	フライングロボットの船舶における応用 (*1)	前田 潔	継続	L4	—
14-008	C	船用ボイラの安全性・信頼性の向上に関する研究	中村雄史	継続	L3	L3(2)
14-010	B	気液二相流の過渡多次元挙動解明に関する研究 (*1)	近藤宏一	継続	—	—
14-011	C	情報通信システムを利用した離着岸操船支援に関する研究	藤井迪生	継続	L2	L2,L3
14-012	A	霧消散予測に関する基礎的研究 (*1)	市川義文	継続	L4	—
14-013	D	油濁海難事故に備えた法整備 副題 北極海航路の行方	遠藤小百合	継続	—	L3

表-6-2 レベル別発表実績数

	レベル	計 画	発表実績
査読付学会誌論文発表	L1	4	4
国際会議講演発表	L2	5	4
国内学会講演発表	L3	6	11
海技大学校研究報告など	L4	7	5

3. 研究業務の事後評価

3.1 自己評価および教室評価

各テーマの研究代表者から研究報告書により自己評価が以下のフォームに基づいて提出された。

(1) 教員研究テーマ申請書に記載された実施項目に対する進捗の度	
(2) 教員研究テーマ申請書に記載された研究成果の発表計画に対する実績	
(3) 船員教育・船舶運航技術の向上への寄与	
(4) 研究成果の船員教育への反映	
(5) 予算計画の妥当性	

(1)及び(2)については、次の4段階評価を行い、評価C又はDの場合にはその理由も記述する。

A:計画した実施項目全て、または計画以上の項目を完了した

B:計画した実施項目の2/3以上を完了した

C:計画した実施項目の1/3以上を完了した

D:計画した実施項目の1/3に達しなかった

(3)及び(4)は記述する(A,B,C,Dの記入は必要ない)

(5)は予算に対する使用額が65%未満または115%を超える場合に、その理由を記述する。それ以外は記入の必要なし。

また、科内評価は以下に示すフォームにより、研究者本人、研究者が所属する科の科長及び同科の研究管理委員会委員の三者が協議の上、3段階(A、B、C)の評点が付けられた。

評価項目	評点
(1) 研究者本人の自己評価の内容が妥当であるか	
(2) 海大で行う研究としてふさわしいものであるかどうか	
(3) 研究内容が船員教育・船舶運航技術の向上のために貢献しているのか(将来も含めて)	
(4) 予算が有効活用されたか	
(5) 海大の設備が有効活用されているのか	
(6) 研究成果が海大での授業等、教育面に反映されているか(将来も含めて)	
(7) 研究成果の発表等をとおして社会に貢献しているか(将来も含めて)	

* A、B、Cはそれぞれの項目に相当する3段階評価(以下を参考に記入する)

- (1) A:ほとんどの自己評価の項目について妥当である、B:おおむね妥当である、C:やや妥当とはいえない
- (2) A:海大が行う研究として極めて適切なテーマである、B:おおむね適当である、C:指針で示す範囲の研究であるがやや適合しない面がある。
- (3) A:極めて貢献している、B:おおむね貢献している、C:工夫次第では貢献できる。
- (4) A:予算要求見積もりが適切であり、かつ使用金額に対して成果が大きい、B:予算見積もりにやや不適切又は使用した金額に対して成果がやや少ない、C:予算見積もりがやや不適切でかつ使用金額に対して成果がやや少ない。
- (5) A:海大の設備等が非常によく活用された研究である、B:おおむね活用された研究である、C:あまり活用された研究とは言えない。
- (6) A:研究成果が授業、実習等を通して学生の教育によく反映された(される)研究である、B:おおむね反映された(される)研究である、C:工夫次第では反映される研究である。
- (7) A:成果を学会等の発表を通して海運界等の社会に非常に貢献した研究である。B:今後の成果が貢献する可能性が十分にある研究である、C:工夫次第では貢献する研究である。

以下の表－7に研究者本人評価（記述式を除く）と科内評価結果の集計表を示す。

表-7 科内評価

研究 番号	研究テーマ名	自己評価		科内評価						
		進捗度	発表実績	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
A14-001-1	船舶の運航技術の伝承に関する研究	B	A	B	B	B	C	B	B	B
A14-002-1	船舶機関技術の最近の動向と機関士教育・訓練	B	—	B	A	B	C	C	B	A
11-001-4	港内タグボートの安全性に関する研究	A	A	B	B	B	C	C	B	B
12-002-3	海事思想の普及へ向けての一試行（コンラッド海洋作品における海政学的要素について）	A	A	B	B	A	B	C	B	B
12-006-3	船舶機関システムの運転管理に関する研究	A	A	A	A	A	A	B	B	A
12-007-3	Engine-room Team Management 訓練に関する研究	A	A	A	A	A	A	A	B	A
12-008-3	機関室シミュレータを用いた運航に関する省エネルギー評価について	B	C	B	B	B	C	A	B	B
12-009-3	分析機器を利用した海洋環境教育に関する研究	B	B	A	A	A	B	A	A	B
13-003-2	航海情報の統合に関する研究	A	A	B	A	A	A	B	B	B
13-005-2	GPS 信号伝搬特性と測位精度に関する研究	C	A	B	B	A	A	B	B	C
14-001	小型船における AIS 受信波のマルチパス影響に関する調査研究	A	A	B	A	A	B	B	B	B
14-002	ECDIS における情報レイヤーのユーザビリティに関する研究	B	D	B	B	B	C	B	B	B
14-003	海事政策と異文化コミュニケーションに関する研究～アメリカ文化における記憶・忘却と「海洋」	B	A	B	B	B	A	B	C	C
14-004	漁船と動力船との衝突事故に関する一考察	B	A	B	B	B	B	B	B	B
14-005	太陽電池及び燃料電池システムの船舶電源への導入に関する研究	B	B	A	A	A	B	A	B	A
14-006	フライングロボットの船舶における応用	B	D	A	B	B	A	B	B	C
14-008	船用ボイラの安全性・信頼性の向上に関する研究	A	A	A	B	B	A	B	B	B
14-010	気液二相流の過渡多次元挙動解明に関する研究	D	—	B	B	B	A	C	B	B
14-011	情報通信システムを利用した離着岸操船支援に関する研究	B	A	B	B	B	A	B	B	B
14-012	霧消散予測に関する基礎的研究	D	D	B	B	B	B	B	C	C
14-013	油濁海難事故に備えた法整備 副題 北極海航路の行方	A	A	B	B	B	B	B	B	B

3.2 全体評価

3.2.1 組織的な研究計画の策定が行われたか

平成26年度研究業務は、年度当初に作成された「平成26年度海技大学校研究計画書」に基づき実施されているが、同計画書は前年度末に研究テーマを募り、研究者の所属する各科でテーマの重複等のチェックを行った上、研究管理委員会で予算等の調整を行うとともに原案を作成し教員会議での審議・了承を経て、幹部会で承認されたものである。

手続き的には以下の規程又は指針に基づいて行われたものである。

- (1) 独立行政法人海技教育機構研究業務規程
- (2) 海技大学校研究管理委員会に関する達

3.2.2 共同研究を行い研究活動が活性化されたか

「2.2 外部資金による産学連携研究」と「2.3 その他の共同研究」において示したように平成26年度は受託研究1件と他機関と正式契約は取り結んでいないが他大学などの共同研究3件が行われた。

3.2.3 研究に対する自己評価体制が構築され、かつ自己評価が適切に行われたか

研究業務の評価について、「海技大学校における組織的研究のあり方についての指針」及び「海技大学校研究業務評価要領」に基づき、(1)研究者本人による自己評価、(2)各科レベルで行う科内評価、(3)研究管理委員会が行う全体評価の3段階で、研究計画書に記載された研究の目的、実施項目、予算及び期待される効果に対して、実際に行った研究によるこれらの達成度を客観的にかつ公平に海技大学校が自己(内部)評価する体制により実施した。本報告書はこれをまとめたものである。また、平成14年度から開始された重点研究については、その計画段階から事前評価を行う体制を確立している。

3.2.4 研究成果の船員教育への反映は行われたか

研究活動を通して研究者本人が船舶運航の高度な技術、安全で効率的な運航のための知識を深めることにより、それぞれの教育業務(授業、実習等)の中で、学生の知識及び技術向上に寄与している。

3.2.5 成果の発表(論文、学会発表)実績が目標を達成したか

平成26年度に計画した成果の発表目標(海技大学校平成26年度計画:10件以上の研究発表等を行う[内、5件以上は国内外での学会発表とする。])に対して、「2.5 研究成果の発表予定と実績」の表-6に示す通り、合計24件の成果発表を行った。これらのうち、査読付き学会誌論文4件、国際学会講演4件、及び国内学会講演11件の合計19件が、国内外での学会発表に相当する。

3.2.6 研究成果をHP等で公表したか

インターネット上で公開している「海技大学校ホームページ(<http://www.mtc.ac.jp>)」の「研究実績/研究成果発表」のページ上の「平成26年度研究成果発表リスト」として以下の項目について公開している。

- (1) 表題(和文・英文)
- (2) 著者
- (3) 発表学会誌名、発表学会名
- (4) 概要

なお、これらのリストを見た外部の研究者などから論文本体の閲覧の要望があれば、これに応えられる体制をとっている。

平成26年度 研究成果一覧

* 査読付き論文・著書

1) 石倉 歩、脇田 礼三*、林 祐司*、村井 康二*

「タグボート乗組員の常態化したヒヤリハットについて」

日本航海学会論文集, 第130号, 平成26年7月.

*神戸大学大学院海事科学研究科

2) 石倉 歩、坂下 純一*、林 祐司*、村井 康二*

「離着岸操船におけるタグボート運用要素の評価」 日本航海学会論文集, 第130号,
平成26年7月.

*神戸大学大学院海事科学研究科

3) 田中 賢司

「ジョゼフ・コンラットの日本への関心」 Conrad: Eastern and Western Perspectives.
Maria Curie-Skowska University Press, 平成26年.

4) 石倉 歩

「港内タグボートの安全運用に関する研究」 神戸大学大学院海事科学研究科,
平成26年8月. [学位論文]

5) 田中 賢司

「『イギリス文化事典』における「船舶」について」

丸善出版, 平成26年11月.

* 国際会議発表

1) 奥田 成幸、堀 晶彦、新井 康夫、新保 雅俊*

「Study on the Fusion of Navigational Information toward e-Navigation」
ENC-GNSS 2014 平成26年4月. *三菱電機(株)

2) 藤井 迪生、林 美鶴*、浦上 美佐子*、若林 伸和*

「The Development of Meteorological and Oceanographic Data Collection and
Recording System Operating on Training Ship」 33rd International Conference
on Ocean, Offshore and Arctic Engineering, 平成26年6月.

*神戸大学大学院海事科学研究科

3) 角 和芳

「Basic study on the application of the fuel cell system operated by Kerosene to
vessel」 World Renewable Energy Congress13, 平成26年8月.

4) 徳留 功樹、中島 賢二、奥田 成幸、堀 晶彦、新井 康夫、松本 浩文*
「Study on the Development of Onboard AIS Reception Performance for a Small Boat」 14th Asia Conference on Maritime System and Safety Research, 平成 26 年 8 月. *水産大学校

* 国内講演

1) 石倉 歩

「港内タグボートの事故およびニアミスについて」
(独) 航海訓練所研究発表会, 平成 26 年 9 月.

2) 遠藤 小百合

「油濁海難事故に備えた法整備」
日本航海学会第 131 回講演発表, 平成 26 年 10 月.

3) 藤井 迪生、若林 伸和*

「GPS コンパスを利用した着岸速度・距離計測システムの開発検討」
日本航海学会第 131 回講演発表, 平成 26 年 10 月.
*神戸大学大学院海事科学研究科

4) 近藤 宏一、佐藤 歩美、沖野 敏彦

「ERM 訓練の深度化に関する研究ー構成と訓練プログラムー」
日本マリンエンジニアリング学会 第 84 回講演会, 平成 26 年 11 月.

5) 佐藤 歩美、沖野 敏彦、近藤 宏一

「ERM 訓練の深度化に関する研究ーアンケートに基づいた検証ー」
日本マリンエンジニアリング学会 第 84 回講演会, 平成 26 年 11 月.

6) 伊丹 良治、中村 雄史、畑中 佑久*

「船用補助ボイラの水質管理に関する一考察」
日本マリンエンジニアリング学会 第 84 回講演会, 平成 26 年 11 月.
*新日本海フェリー (株)

7) 中村 雄史、福田 勝哉*、劉 秋生*、畑 幸一*

「低流速時の円管内流動非沸騰熱伝達に関する研究」
日本マリンエンジニアリング学会 第 84 回講演会, 平成 26 年 11 月.
*神戸大学大学院海事科学研究科

8) 田中 賢司

「Joseph Conrad の“Heart of Darkness” と 積 逯空の『死者の書』」
日本英文学会，平成 26 年 12 月．

研究報告・技術資料等

1) 伊丹 良治、その他 20 名

「2013 年におけるマリンエンジニアリング技術の進歩」
日本マリンエンジニアリング学会誌第 49 号，平成 26 年 7 月．

2) 久保野 雅敬、浅木 健司、濱田 聡樹、高平 但、藤井 迪生

「BRM 訓練受講者の視点によるシミュレーションシナリオの評価に関する一考察」
海技大学校研究報告 第 58 号，平成 27 年 3 月

3) 藤井 迪生、浅木 健司、久保野 雅敬、濱田 聡樹

「BRM 訓練に用いるシミュレータ訓練シナリオレベル定量化手法の検討
-BRM スキル欠落影響度 (Failure Effect Level) の提案-」
海技大学校研究報告 第 58 号，平成 27 年 3 月

4) 杉田 和己

「メルヴィル『ビリー・バッド』における語り手の「読み」
-サマーズ号の「叛乱」と「言及的」な語り手-」
海技大学校研究報告 第 58 号，平成 27 年 3 月

5) 佐藤 歩美、近藤 宏一

「機関シミュレータ及び事例解析を用いた ERM 訓練の有効性」
海技大学校研究報告 第 58 号，平成 27 年 3 月

6) 岩瀬 潔、遠藤 小百合、吉木 椿

「漁船と動力船との衝突事故に関する一考察-I
-漁船乗組員へのアンケート結果その 1-」
海技大学校研究報告 第 58 号，平成 27 年 3 月

以上